

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	枝 廣 和 憲
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p>青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響に関する心理学的研究          —居場所におけるナナメの関係に着目して—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教授	栗原 慎二	
審査委員	教授	岡 直樹	
審査委員	教授	井上 弥	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、青年期中期における交友関係が自我発達に及ぼす影響について、居場所におけるナナメの関係に着目して、量的・質的の両者から検討した研究である。</p> <p>具体的には、次の6つの研究により構成されている。研究1においては、質問紙調査により、年上の友人を含めた交友関係を年齢別に高校生がどの程度有しているか、その属性および学年差、性差を検討し、約6割の高校生が「1～2歳年上」の友人を持っており、「学外における1～2歳年上の友人」について、異性の友人を男子より女子が多く持っており、逆に同性の友人を男子が女子より多く持っていたことを明らかにした。研究2においては、質問紙調査により、青年期中期の交友関係において、同年輩の友人関係とナナメの关系的質的差異を検討した結果、同年輩においても同年か1～2歳年上かによってその関係に差があることが示唆された。研究3においては、青年期中期における交友関係の様態を明らかにするために、青年期中期を対象とする居場所においてエスノグラフィを用いて、質的検討を行った結果、それぞれのエピソードに共通してみられるのは、高校生と大学生スタッフが、両者とも敬語等を使わず同等にしゃべっている点であり、また、行動にも両者ともに遠慮がない点も特徴的である。一方で、進路について話す際には、敬語等は用いない同等のような関係ではあるが、「相談」を持ちかけており、豊嶋(2004)の指摘するナナメの関係が観察された。</p> <p>研究4においては、研究1、2および3で得られた知見に基づき、青年期中期の交友関係のうち、同年輩の友人関係とナナメの关系的自我発達上の危機状態に及ぼす影響を質問紙調査により、検討した結果、男子および女子あるいは1年生～3年生いずれの場合も青年期の自我発達に「同年の友人」の人数は影響を与えておらず、「学外にいる1～2歳年上」の同性友人の人数が増えると、ほぼ男女とも学年の差なく、青年期特有の葛藤がおさまり安定していた。松井(1990)のいう友人関係が青年にとって果たす機能としての、モデルに着目すると、発達的に進んでいると推察される「1～2歳年上」の友人をモデルとして学習し、あるいは、重要な他者として同一化を行うことで自我発達が促進されていると考えられた。さらに、この重要な他者の対象が親から友人へと移る時期であり、その移行期に際し、「年上の友人」というその中間に位置する存在が重要な他者としての役割を果たし、自</p>			

我発達に影響を与えていると推察された。研究 5 においては、研究 1, 2 および 3 で得られた知見に基づき、青年期中期の交友関係のうち、同年輩の友人関係とナナメの関係の未来に対する時間的展望に及ぼす影響を質問紙調査により検討した結果、本研究の結果では、「同年」の友人数は、未来に対する時間的展望との関連がなく、「学外の 1~2 歳年上(同性)」の友人を多く持つほど、未来に対する時間的展望が肯定的であった。生涯発達の観点から、Levin(1951)は児童期から青年期の未来に対する時間的展望の範囲が拡大するとしているが、実証的な研究によって未来に対する時間的展望の広がり範囲は拡大するが青年期に一時的に縮小することがあり、さらに関心が近い未来に向くと示されている(白井, 1997)。その近い将来にある「学外の 1~2 歳年上(同性)」の友人を持つことで具体的な将来展望を描きやすくなり、その結果として未来に対する時間的展望が肯定的になることが推察された。研究 6 においては、研究 4 および研究 5 における知見に基づき、青年期中期における交友関係、特にナナメの関係が自我発達に及ぼす影響について、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model) の手法を用いて、質的に検討した結果、面接対象者は、青年期中期に自分が「優等生」であるか否かの自我の揺らぎを経験している。そこに、ナナメの関係に位置する大学生スタッフの「ふざけてもいい」「紆余曲折して」もいいといった態度によって、「優等生」でなければならない」という縛りから解放され、自分の自我の揺らぎを安定させていったと推察される。その後の進路選択や職業選択に対しても、ナナメの関係といった具体的な未来に対する時間的展望をモデルとして取り入れ、確立していったものと解釈できる。以上から、ナナメの関係を持つことが自我発達にポジティブな影響を及ぼしていると推察された。

研究上評価できる点としては、先行研究では、友人を同年輩に限定して取り扱って検討されてきたが、青年期中期におけるナナメの関係という視点から、自我発達に及ぼす影響について検討し、青年期中期においてナナメの関係が自我発達に対し、正の影響を及ぼすことを量的に明らかにするとともに、質的研究を通じて、その具体的様相をも明らかにできた点である。また、従来の研究では、年上が年下に関わる研究が主で、年下への影響を調査したものは少ないが、本研究では、「ナナメの関係」が年下の自我発達に適応的な効果をもたらすという結果を得ている点も評価できる。

またこれらの結果は実践上にもいくつかの示唆を与える。1 点目は、異年齢交流および異校種間交流への応用である。同年代を中心とするピア・サポートプログラムに異年齢交流および異校種間交流などの「ナナメの関係」という視点を加えることで、新たなピア・サポートへの支援の可能性を探ることができると考えられる。2 点目は、近年散見されるようになってきた大学生のボランティアが高等学校に入る活動(例えば、松田, 2007; 下岡他, 2010) や、キャリア支援を目的とした活動などに対して、実証的な裏付けを提供すると共に、これらの活動が、キャリア支援に限らず、自我発達への肯定的な影響も及ぼすことを示唆した点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 26 年 2 月 20 日